

# 第8回講座

## 人助けに理由は要らぬ

元「スコップ団」団長 平了さん

## 被災者視点で農家支援

リルーツ代表 広瀬 剛史さん

大学生らが東日本大震災に向き合う通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第2期の第8回講座が13日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。「ボランティアの力」をテーマに宮城県山元町で被災家屋の泥かきに尽力した「スコップ団」元団長の平了さん(40)＝現・青空応援団団長＝と仙台市の東部沿岸地区で農業を軸とした地域支援に取り組む学生グループ「リルーツ」代表の広瀬剛史さん(44)が講師を務めた。

### 311 伝える／備える 次世代塾

第2期

1人目の平さんは友人の遺体捜索で被災者支援に関わるまでボランティア活動の経験はなかった。「当時は何をしていいのかわからなかった」と切り出し、「まずは困っている人の要望を聞こう」と呼び掛けた。

ドライアイスやガソリン調達に奔走し、活動にはインターネットで心ない書き込みもされたが「みんなに好かれる必要はない」と気持ちを切り替えたという。

講師2人目の広瀬さんは冒頭、「被災地でのボランティア活動はミスマッチが起きていた。行政は上から目線で、民間は自分優先目線だった。被災者の視点が欠けていた」と指摘した。相手の立場に立った長期

的な支援活動ができることを重視した広瀬さんは2011年4月に「リルーツ」を立ち上げ、大学生でも活動しやすいよう仙台市若林区東部を活動エリアとした。広瀬さんは「若林区東部は農家が多い。農業再開のため田畑のがれき撤去から始め累計約3万人のボランティアを受け入れた」と説明。コミュニケーション再生に向けては学生が野菜づくりも始め、農家との信頼関係も醸成できたと紹介した。「震災後、学生5人が就

農した。若林の復興に何が必要かという視点を忘れず、ボランティアの媒介役を務めていく」と訴えた。講話後、当日出席した受講生約50人はグループに分かれて討論。「日ごろの積み重ねが人助けにつながる



住宅内に堆積した土砂や漂流物をかき出すスコップ団の団員＝2011年9月3日、宮城県山元町

### 受講生の声



**相手の思い酌む**  
人助けや復興に尽力した、講師2人の熱意と覚悟に圧倒されました。仕事でもボランティア活動でも、

相手が何を求めているか気にかけて、抱えている問題を解決していくことが良好な関係を続ける基本だと思いました。(東京都北区・会社員・森山佳奈さん・28歳)



**自己満足避ける**  
被災者が一番望んでいることをするのがボランティアの役目だと強く思いました。過度の支援は支援者側

の自己満足につながる恐れもあります。普段から、誰かが困っていたら助けることが大切だと感じました。(富谷市・東北福祉大2年・小幡隼人さん・19歳)



**意味を考え直す**  
ボランティアが被災者と一緒に活動することが、コミュニケーション形成の一助になるのではないかと感じま

した。「誰のための支援か」など、ボランティアの意味を改めて考え直すことも必要だと思いました。(東根市・東北芸術工科大3年・菊池みなとさん・21歳)

311「伝える／備える」次世代塾を運営する「311次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。協議会事務局は河北新報社防災・教育室＝メール jisedai@po.kahoku.co.jp